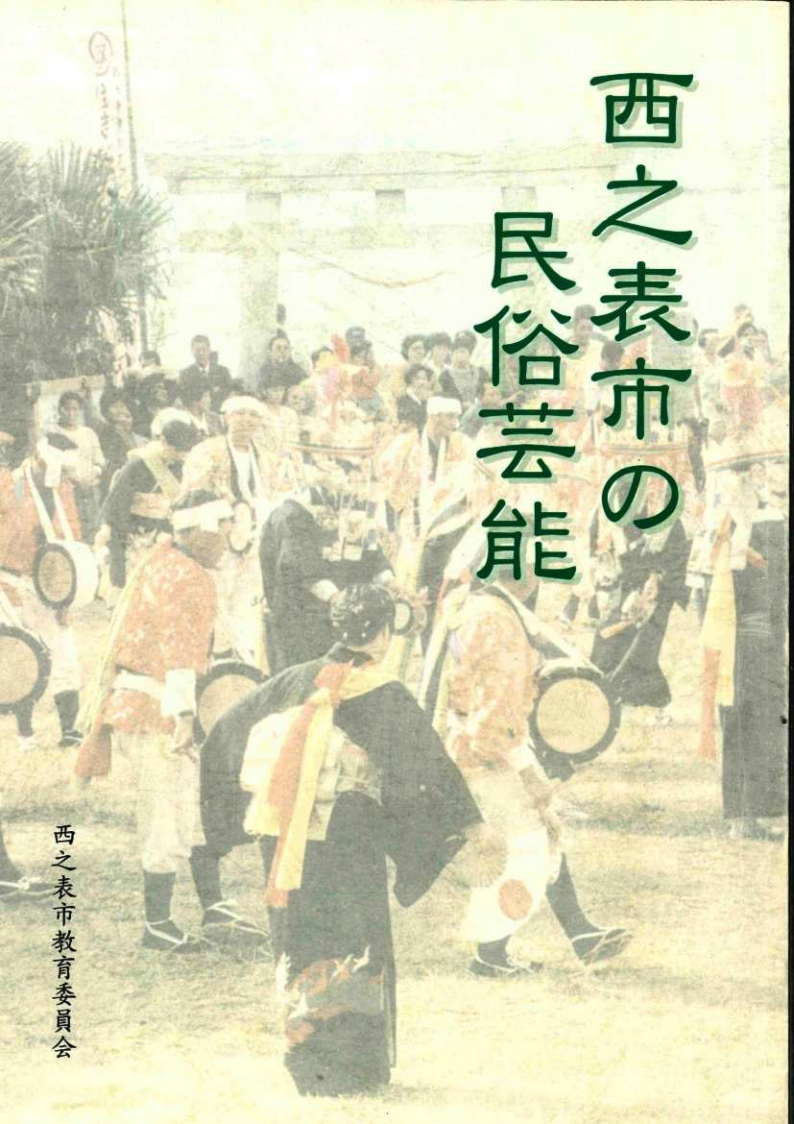

西之表市の民俗芸能

西之表市教育委員会

「西之表市の民俗芸能」の発刊にあたって

西之表市教育委員会

種子島は「民俗芸能の宝庫」といわれるほどかつては数多くの芸能が各地域で残されていました。

しかし、それらの民俗芸能も、今日では、過疎化による踊り手の減少や生活様式の変化などで、年々その数は減少しつつあります。

日本書紀に天武十年（六八二）「多禰島の人等を飛鳥寺の西の河辺に饗へき。種々の楽を奏しき」と記録されていて、種子島の芸能の歴史は奈良時代までさかのぼることになります。また、種子島の歴代の島主は幾度となく京都へ上り、すすんで京文化を学び、種子島へ受け入れています。

このようにして各時代を変遷した芸能が流入し、種子島独自の文化と融合して、今日の豊かな民俗芸能の島に発展したのです。

種子島の民俗芸能は、種子島大踊り（安城踊り）・源太郎踊り等の大踊り、どすこい・なぎなた踊り等の中踊り・小踊り、それに座敷舞・盆踊り・狂言・士踊り・町人踊りなどに区分されます。

ここに掲載するものは、無形文化財として県および市に指定されているものを中心として、西之表市で保存・継承されているものです。

地域に残る民俗芸能を保存していくことは、取りもなおさず先人の残した文化を後世に伝えていくことであり、困難も伴いますがたいへん重要なことです。かねてから保存・伝承に取り組んでおられる保存会の方々に感謝申し上げますとともに、今後のご活躍を祈念いたします。

目　次

【鹿児島県指定文化財】

・大的始式（西之表）……1
・横山盆踊り（上西横山）……3
・種子島大踊り（現和武部）……5
・めん踊り（住吉深川）……10
・獅子舞（古田）……11

【西之表市指定文化財】

・花踊り（国上寺之門）……12
・太鼓山（西之表）……14
・安納棒踊り（安納軍場）……15
・古田棒踊り（古田）……16
・源太郎踊り（住吉浜之町）……17
・ヨンシー踊り（現和庄司浦）……20

【その他の無形民俗文化財】

・どすこい（西之表洲之崎）……21
・なぎなた踊り（国上湊）……21
・新地節（伊関柳原）……22
・虚無僧踊り（現和上之町）……22
・兵児踊り（現和西俣）……23
・ヤートセー（現和西俣）……23
・おつや口説き（立山）……24

大的始式（県指定文化財）　西之表

《由　来》

栖林神社境内で行われる大的始式は、本源寺の入相太鼓の合図により始められる式典で、弓場には陣幕を張りめぐらし、かがり火を六か所に焚き黄昏の頃行う格調高いすぐれた行事である。

その由来は島主十二代種子島忠時公の弓の兄弟子である武田筑後守光長が京都から来島し、島主の依頼で弓術の指南となり、宮中で毎年一月十二日に行われていた御的始式を文亀元年（一五〇一）より種子島家で行うようになったものである。光長は、将軍（十一代）足利義澄の時、明応六年春、京都の三十三間堂に於いて通し矢一万二千本を行い将軍家から射礼記、並びに感状を賜った程の優れた弓取りであった。

的の直径は、古代定法で行う的の径五尺八寸（約百七十五㎝）、的色紙は、中心より白黒白黒で地上七尺八寸八分（二百三十七㎝）の串木に浅黄の綱で三方に吊るし、射る距離は弓の長さ三十三杖（七十三ｍ前後）であった。現在は、近的の二十八ｍで行っている。

《式　順》

一　栖林神社拝殿における式

① 神司
② 祓い
③ 神司（大的始の祝詞）
④ 玉串奉奠

神官、島主、お家方代表（弓太郎）、他家代表（二番射手）、師範役、矢取り、神社総代、来賓総代

二　本殿から弓場へ
三　射手は大的の前に扇形に蹲踞し宮司が的を祓う。
四　「射手の衆本座へ着かっしゃれ」の合図で射手は本座へ
五　射手は儀式にのっとり本座祓いを行い座る。
六　松明に火が入り射技に入る。
七　一番建は弓太郎と二番射手で行う。
　①　犬神祓い…射手の前に盛ってある砂に「犬の字」を三回書く。
　②　天地祓いを行い甲矢を射る。甲矢は送り矢といい息の続く限り高声で「ヤァー」と声を出す。
　③　天地祓いを行い乙矢を射る。乙矢は止め矢といい高声で一殺必中の勢いで「エィ」と短く切る。
八　二番建は三番射手と四番射手で行う。
　以下「七」の「①②③」のとおり行う。
九　三番建は五番射手と六番射手で行う。
　以下「七」の「①②③」のとおり行う。
（矢取りは一番建終了後、二番建終了後、三番建終了後行い、矢は一番射手→二番射手の順序で渡す。）
十　「七」「八」「九」を三回行う。
十一　三回目の六番射手の六射目に三十五本までがすべて命中した場合、師範役より「はずまっしゃい」の声がかかり、「満つれば欠くる」の戒めにより最後の一本は故意に外される。これを「はずみ矢」という。
十二　師範役は「十の衆参らっしゃい」という。はずみ矢をした射手以外の射手は「賞の目録」を島主よりいただく。
　現在は金一封であるが、昔は太刀、馬一頭であった。
十三　退場、矢取りを先頭に入場と逆の順序で退場する。
十四　直会の儀
　はずみ矢をした射手にはこの席で「賞の目録」が与えられる。

横山盆踊り（県指定文化財）　上西横山

《由　来》

寛永五年（一六二八）二月、比志島国隆（島津家家老）は、悪政を理由に種子島に遠島となった。国隆の愛妾であった阿久根出身の千代女（中将）は、後をおって種子島に渡ってきて、国隆と共に上西横山に住んだ。

同年十一月、国隆は切腹を命ぜられ、十一月三十日横山にて自害した。このとき千代女も殉死した。国隆五十一歳、千代女三十五歳であった。

横山の人々は、二人の死をいたみ、特に千代女の節婦としての心情をしのんで、旧七月七日にその霊をまつり、踊りを奉納するようになった。

《特　徴》

種子島の盆踊りは、曲も手振りもきわめて静かで荘重、全員がカムキという面をかぶって踊る。カムキは清浄な霊に人の息がかからぬためのおおいであり、同時に踊り手自身が精霊であって、静かな中にも霊への畏敬をこめたものである。

横山盆踊りは、曲がいくつもあって変化していくが、千代女の部分は哀調切々として、人の心をうつ調べである。

《歌　詞》

（出端）

種とりてうれし　うえなわ　武蔵野の　しょもくやらん
吾が思い草　茂れ茂れ茂れ　おさまる御代こそ　めでたけれ

「めでためでたの」

めでためでたの　御殿屋敷　小倉九ツ　御門八ツ
船は千艘よ　御金舟よ　金をおろすは　品川に

「梅が枝」

梅枝や　匂いにかげる　わが心　富士のうらばに　えおく露
その名玉かずら　かけしばし

「鯉の小池」

鯉の小池　浮いたる舟は　銀の白金　櫓こげや
おしこめ　ととの浦

「阿久根千代女は夜船こぐ」

(一) 阿久根千代女は　夜舟こぐ　ハイヤー
足もだるんど　手もだるんど　ハイヤー
まして夜風も　寒かるど　ハイヨーホーホー
寒かるど　寒かるど　ハイヤー
まして夜風も　寒かるど　ハイヨーホーホー

(二) 阿久根千代女は　ちご心　ハイヤー
玉章に　また唄かえて　ハイヤー
花の恋の女に　やると見た　ハイヨーホーホー
やると見た　やると見た　ハイヤー
花の恋の女に　やると見た　ハイヨーホーホー

(三) 花の恋の女の　おしゃれごと　ハイヤー
うつつ名の立つ　玉章を　ハイヤー
水に浮草　笹の露　ハイヨーホーホー
笹の露　笹の露　ハイヤー
水に浮草　笹の露　ハイヨーホーホー

(四) 坊のとばせに　舟のりて　ハイヤー
あらし待ちたる　心して　ハイヤー
これも浮世の物語　ハイヨーホーホー
物語　物語　ハイヤー
これも浮世の物語　ハイヨーホーホー

「春の夜の」

春の夜の夢　おどろかす　くだかけの
その君ぎみの物思い
また逢うことは五つ川の　深き心は　かぐち草
根引きにせんと　よいかわす　身は捨て草で　捨てられて
流れし此の身は　淀川の　何をたよりに　浮草の
波に揺られて　歌語ろう　あわんや　君が情けなやねたましや
それは若草　身はうらみ草　何ぞそなたに　逢いたい話
秋の別れも　せん仲なれど　よしなき恋を
人にせかれて　面白や

「ことしゃめでたいの」

ことしゃ　めでたいの　福神丸に　黄金の台に　松植えて
一の枝には　銭がなる　二のや枝には　金がなる
すえのみどりに　鶴すえて　なにとさえずる
立ちより聞けば　ことしゃ　よい年　宝の年よ
道の小草に　米がなる　思いのままに　満腹へ

(引端)

せんとみやまの　みやまの　奥の入りには
ちょうと出たよしわか　ふじはかまきて見れば　たて袖
長羽織　裾にゃうれしおがのこに　よしながきみおいた
おもしろや

種子島大踊り（県指定文化財）現和武部

《由　来》

鎌倉から伝わったと伝承されているが、室町時代に種子島公が度々京都に行ったときに、関西地方の踊りを家来たちに習わせたものが種子島に伝えられたともいわれる。従って四百年以上前からある踊りである。

《特　徴》

種子島の大踊りは、百姓踊り（太鼓を両バチで叩く）と、武士踊り（太鼓を片バチで叩く）の二通りに大別できるが、武部の大踊りは百姓踊りの系統をふまえている。しかし、武士踊りの姿も見られ、むしろ大踊りが二つに分化する前の姿をとどめている。

武部の大踊りは、八つの踊りからなるが、現在でもすべてを踊ることができる。また、一つの踊りが「寄せ」「出端」「本踊り」「崩し」「引端」の五つからなるので、合計四十通りからなっている。

《歌　詞》

「この城」

一　（ン）この城の西と東のお山を見れば
　　木の葉の上に黄金花咲す（ンヤア）黄金花咲す

二　（ン）朝日射す夕日輝くこの城元に
　　黄金の花が咲しやこだるる（ンヤア）咲しやこだるる

（崩し）

　東長者よ西長者　中なる長者の茶うけには
　黄金が九つおいたよな　二つは舎弟にまいらしょう
　七つで長者になるならば　黄金の御門を建て申そう
　黄金の御門が建つならば　銭で築地を築かしょうよ
　銭で築地を築くならば　槍で柵を結わしょうよ
　槍で柵を結うならば　太刀で扉をはがしょうよ
　太刀で扉をはぐならば　やらやら見事やら見事
　引いてもどる夜明けには　夜明け方の横雲

「これのお庭」

一　（ン）これのお庭に雛が遊ぶ（ン）みな国々も太平楽に
　　（ン）弥勒の御世と歌う鶏　歌う鶏

二　（ン）これのお庭の戌亥の角の三本えのき
　　（ン）本は唐金白藤がかり
　　枝には黄金がなりそうよ　なりそうよ

（崩し）

　これが屋敷は誰が屋敷　本郷つの守伊東殿
　誰が建てたる主殿か　薩摩の喜之助清務殿
　柱は何本建てたよな　六十六本みな黄金
　垂木口には金を貫き　上は桧皮の熨斗葺
　熨斗葺に破風葺に　葺いたる茅は板金
　やらやら見事やら見事
　引いてもどる夜明けには　夜明け方の横雲

「締むれば鳴る」

一　（ン）締むれば鳴る　締めねば鳴らぬ小鼓を
　　（ン）心調べに手をやれば鳴る（ンヤア）手をやれば鳴る

二　（ン）越しをして（ン）薩摩の方を眺むれば
　　（ン）球磨八代を鏡とぞ見る（ンヤア）鏡とぞ見る

三　（ン）恋をして（ン）渚をゆけば千鳥鳴く
　　（ン）なお鳴け千鳥恋の暗そうよ（ンヤア）恋の暗そうよ

（崩し）

　関より此方の弓取りで　手には真皮のゆがけぬき
　足には蓮華の靴をはき　虎毛の犬を腰づれに
　しのだが山を狩るほどに　十三連れた牝鹿を
　一つも残さず射て召せよ
　やらやら見事やら見事
　引いてもどる夜明けには　夜明け方の横雲

「月日かけ」

一　月日かけて変わらじと契りし仲なれど
　　（ン）悔しや増す花なれど（サア）去年の暦で
　　見捨てられた（ン）うつろいやすき殿はうらみん
　　（ン）数ならぬ身をうらみそよ

二　（ン）袖のふりあわせさえ他生の縁ときく
　　（ン）言わずや枕を並べて（サア）打ちときておいて
　　（ン）思いしことを今語らじと（サア）
　　またもあおうぞよ振り様で添うよ

（崩し）

　豊後の勢は日向入る　日向の佐土原都於郡
　それが薩摩にもれ聞え　薩摩の館におあげやる
　十万余騎ほどおかけやる　往き来ののぼせもおかけやる
　それで談合めしすえて　松原陣をおかけやる
　松原陣の勢いで　名貫川までつかれける
　耳川までこそ討たれける　臼杵八町攻め落す
　薩摩の殿の仰せには　髪をばらりと切りすてて
　豊後が腹を召すならば　立てたる軍師を引かしょうよ
　やらやら見事やら見事　やらやら見事やら見事
　引いてもどる夜明けには　夜明け方の横雲

「堺北の町」

一　堺北の町に札が立つとなあ（ンヤア）他人の嫁女は
　　（ソレ）盗るな盗らせぬ（アイヤ）盗るな盗らせぬ
　　（ンヤア）恋の踊りは（ソレ）ひと踊り
　　（アイヤ）ひと踊り

二　堺出づれば住吉の（ンヤア）松によそえて
（ソレ）小松恋しや（アイヤ）小松恋しや
（ンヤア）恋の踊りは（ソレ）ひと踊り
（アイヤ）ひと踊り
三　忍ぶ小細路に笹植えて（ンヤア）来る夜こぬ夜は
（ソレ）笹が知る（アイヤ）笹が知る
（ンヤア）恋の踊りは（ソレ）ひと踊り
（アイヤ）ひと踊り

（崩し）
おらが弟の千松は　まだも幼き七つ児で
伊勢と熊野に初まいり　供や友だち花折りて
花は何花問うたれば　久遠法華経菊の花
一枝おりて手に持ちて　二枝おりて腰にさす
三枝おり目に空見れば　堺町から日がくれて
そばなる小家に宿とれば　宿もせましや小座せまし
晩起きて空見れば　稚児のようなる天晴で
盛り杯を手に持ちて　兄のゆずりの白小太刀
御父のゆずりの笙の笛　城の麓にふく笛は
世の中よかれと吹き鳴らす　やらやら見事やら見事
引いてもどる夜明けには　夜明け方の横雲

「佐渡と越後」
一　（ン）佐渡と（ヤア）越後は
（サア）辻向かい辻向かい
（サアエー）橋をや架けよもの
（サア）船橋を船橋を
二　（サアエー）われ（我）を（ヤア）思えば
（サア）そなたこそ　そなたこそ
（サアエー）芭蕉の（ヤア）葉の露
（サア）ふりしゃんと　ふりしゃんと

三　（サアエー）あれ（吾）は（ヤア）備前の
（ヤアサア）錆刀さび刀
（サアエー）思い（ヤア）合わせて
（ヤアサア）とぎ欲しや　とぎほしや
四　（ン）昔しや（ヤア）松の葉に
（ヤアサア）二人ねた　二人ねた
（サアエー）今は（ヤア）芭蕉の葉に
（ヤアサア）ただ一人　ただ一人

（崩し）
おらが弟の千代若は　まだも幼き十三で
藤野の戦にさそわれて
三枚かさねの蛇腹巻き　黒赤銅の打ち力
前八文字にささせて
敵の城方打ち眺め　味方の陣をふしおがみ
かかれ　かかれと招かるる　やらやら見事やら見事
引いてもどる夜明けには　夜明け方の横雲

「御門のせび」
一　（ン）おらとそなたはよ　御門のせびよ
昼は別れて（ン）夜ばかり（ズンチキ　ズンチキ）
二　（ン）おらとそなたはよ　瀬戸打つ波よ
（ン）寄せてかえして
（ン）また寄せつ（アズンチキ　ズンチキ）
三　（ン）おらとそなたはよ　伏し木の陣よ
（ン）仲のよいのは
他人知らん（アズンチキ　ズンチキ）
四　（ン）おらとそなたはよ　木犀花よ
（ン）匂いくるまで
（ン）なつかしか（アズンチキ　ズンチキ）
五　（ン）おらとそなたはよ　鈴尾の虫よ
（ン）忍びかねてよ
（ン）鳴くばかり（アズンチキ　ズンチキ）

（崩し）
肥後と薩摩の間にこそ　朝日嶽とて嶽がある
その嶽の麓に天より駒が降り下る
天より降りくる駒なれば　鞍は何鞍敷かしょうよ
金覆輪の鞍を敷く　鐙は何をささしょうよ
銀鐙をささしょうよ　その駒に召す殿は
薩摩の館とうちしれて　あたりの草木も打ちなびく
やらやら見事やら見事　やらやら見事やら見事
引いてもどる夜明けには　夜明け方の横雲

「武蔵野」

一　武蔵野に手に鷹すえて（ソヤア）あのきじとあわせた
二　きじもきじ　つれないきじよ
（ソヤア）あの様をもどした
三　朝露に髪ゆいかけて（ソヤア）あの花つめばよなあ
四　花つめば男の子がまねく（ソヤア）あの花もたまらぬ
五　むこはくる肴はないが（ソヤア）あの浜に出てみよう
六　浜に出て貝蛤を（ソヤア）あの見るが肴よ

（崩し）

十七八の殿ばらが　つるが駒に打ち召して
狩りよ狩りよとふれていく
狩り場はどこよと問うたれば　山と山瀬の間ときく
射手を早めよ本田どの　勢子を早めよ本田どの
良うか射手をも揃えて　淀の左右に立てようよ
千人射手をそろえて　淀のわたりに立てようよ
鹿が七つたむらを　五つは前に相とりて
間の残りの二つは　なおも淀をわたそうよ
やらやら見事やら見事　引いてもどる夜明けには
夜明けの方の横雲

めん踊り（県指定文化財）　住吉深川

〈由　来〉

めん踊りはいつ種子島に伝来したかは不明であるが、その歌詞より江戸初期ではないかと思われる。

面を被りひょうたんを腰にぶらさげて踊るところから「ひょうたん踊り」ともいわれる。

以前は、各家の長男だけが踊り、養子や二男、三男には踊らせなかったという。

〈特　徴〉

出端の楽拍子、および時々鳴らす太鼓の調子良さとはうって変わって、メロディーは一抹の哀愁をたたえながら、独特の節まわしで歌われていく。そのメロディー、拍子のコントラストに加えて、全体が統一された芸能となっている。

面に猿が混じり、道化役を演ずる。哀調とともに滑稽さもたたえ、多分に室町時代頃の芸能の影響も受けていると思われる。

〈歌　詞〉

一　金山に　三味線無いとは　誰が云うた
なればこそ　こま嬢を　乗せてさまやろう
二　新舟と　茶舟が無いとは　誰が云うた
なればこそ　竹嬢を　乗せてさまやろう
三　七曲り小川ですそがぬれそうよ
小松原入りては　出端も入端も
四　ほんになりたよ　大和様のひょうたんじゃ
昼は御腰に　下げられて
キラタンキラタン

獅子舞（県指定文化財）　古田

〈由　来〉

明治時代の末、大分県から椎茸の栽培のために古田に移住してきた、川野浩太郎、石井又造の両氏が地区民に伝えたもの。

大正三年に大正天皇御即位記念として初めて披露され、以来毎年十月に行われる豊受神社の願成就に御神楽として奉納されている。

〈特　徴〉

獅子二人と天狗と猿二人の五人で舞う。

はじめは獅子を相手に天狗が茶化す。やがて獅子が怒って天狗におそいかかる。獅子と天狗の激しい争いが続き、一度天狗が負けるが、やがて活気づき、刀と軍配の巧みなあやつりで、終わりには獅子が力尽きて後退していく。

猿はそれぞれ獅子、天狗側につくが、一定の舞の形はなく、獅子及び天狗の動作をまねしながら、ときどき猿どうしが争い、舞の道化役を演じる。

舞終わったあと、獅子は一～二歳児の頭を魔よけのため噛んでやる。

獅子も天狗もかなりの体力が必要であり、この役には青年たちがあたっている。

鳴物は大太鼓、小太鼓（二人で交互に叩く）、横笛で、横笛は古田に自生しているニガダケを使った手製である。

歌詞はなく、ところどころで「ホース」という掛け声をかける。

花踊り（市指定文化財）　国上寺之門

《由　来》

元来「大踊り」といわれ、太鼓を下げた五十人の男で踊られていたが、寺之門特有に変化してきて、今の形となった。口碑では、室町時代頃、都の落人が国上の浦田に上陸し、寺之門付近に住み始めたが、彼らが都の思い出をこの踊りに託して伝えたといわれる。

《特　徴》

踊りのテンポは極めてゆるやかで、種子島の踊りの中で最も優雅といわれている。全体の踊りの根底にあるものは、早苗植えの所作で、早苗を象徴とした花を持って踊る。

また、疫病退散を祈る「やすらえ花」、すなわち「花しずめ」の踊りには花祭りの要素も加わって、単純化された中にも気品がうかがわれる。

《歌　詞》

（出端）

すげのお笠でお顔を隠し　三十三間の清水寺に　七日こもりて

兵武のけいこ　一で手裏剣　二で薙刀（なぎなた）よ　三で小太刀をすらりと抜いたエー

（本踊）

（一）酒田ヨソナー　千代嬢は酒田千代嬢はなぜ髪や結わぬ

（二）柳もヨソナー　ないかよ柳も　ないかよ　油もないか

（三）柳もヨソナー　ござるよ柳も　油もひらも手もござる

（四）髪もヨソナー　できたよ髪も　できた島田の髪が

（五）寝夜のヨソナー　行燈　寝屋の行燈　だが来て消やす

（六）様のヨソナー　恋風様の恋風　そっと来て消やす

（引端）

京屋大臣五や娘　ハラヤーサーサササー　ヤレヤレヤレ

七ツ時からお伊勢に心　ハラヤー　サササー

ヤレヤレヤレ

親にかくれてチョイト抜け参る　ハラヤーサー

親に隠るな　暇ぐりょ参れ　ハラヤーサ　サササー

ヤレヤレヤレ　ここはどこかと　公家衆に問えば

ハラヤーサー　サササー　ヤレヤレヤレ

踊りゃよいもの　また踊りましょう　ハラヤーサ

ササササー　ヤレヤレヤレ

これできりましょ　やめましょエー

太鼓山（市指定文化財）　西之表

《由来・内容》

八坂神社祇園祭行事の中で、最も勇壮で男性的な行事である。編み笠に白のハッピ、白ズボン、白タビの若衆約八十人が、白はちまきに白装束の少年四人と太鼓を乗せたやぐらをかつぎ、「チョッサー　サセサセ」のかけ声をはりあげ、太鼓を打ちならしつつ、八坂神社から市街地を通り王之山神社まで練り行く。特に、途中甲女川を渡る太鼓山の光景は壮観である。

行列の先頭には長い柄の大きな傘が飾られる。山車には着飾った婦人や少女が乗り、太鼓、三味線、鉦などではやしたて、市中を練り行く。元禄の昔がしのばれる優雅さがある。

チョッサーは長傘（チョウサン）からきているといわれる。明治八年旧暦六月十五日に祇園祭が始められ、太鼓山もその時より始められた。

安納棒踊り（市指定文化財）　安納軍場

《由　来》

棒踊りは種子島各地にあるが、いずれも鹿児島本土より明治になって移入してきた芸能である。安納の棒踊りは軍場集落に伝承してきたものであるが、姶良郡加治木町の大工石野政蔵氏から習ったもの。

棒踊りの良さは激しい太刀さばきと一糸乱れぬ集団美にある。元来種子島の芸能は優雅でおおらかである点に特色があるが、薩摩示現流の気合のこもった棒踊りも、種子島に定着した。

《特　徴》

・安納棒踊りは、出端踊り、出端、本踊り、引端の四つからなっている。

・島内の棒踊りよりテンポが早く、棒の間に鎌が入っている。

《歌　詞》

（出端）

おせろが山だよ前は川よ大川　かたげたつとは　中はにぎりめし

（本踊り）

一　焼野のきじは　丘の野に住む

二　山太郎ガニは　川の瀬に住む

三　清めの雨が　かさにバ（ア）ラリと

（引端）

やや山ではエーヘンヨー大川

古田棒踊り（市指定文化財）　古田

《由　来》

日置郡から安城に移住後、古田に住むようになった上妻次郎氏が、大正十年、当時青年会員の上妻静馬氏等に教えたのがはじまりである。

その後、毎年古田の豊受神社の願成就の余興として踊り伝えられたものである。

《特　徴》

棒と鎌との打ち合いが特に激しく勇壮な踊りである。入場・棒突き・踊り一回目・踊り二回目・退場で構成される。

歌やはやしに合わせて踊り、勇ましくテンポのよい踊りである。

《歌　詞》

一　今こそ参る　神に参詣す
二　焼野のキジは　岡の背に住む
三　おせろが山は　前は大川
四　鎌の柄が折れた　三束切りおく

源太郎踊り（市指定文化財）　住吉浜之町

《由　来》

歌詞の二番に「山口くだりの源太郎よ」とあるところから、源太郎踊りというようになったものらしい。

源太郎踊りは、種子島の代表的な郷土芸能の一つであり、住吉に古くから伝承された後、島内各地に広がった。いつ頃住吉に伝えられたかはっきりとしないが、その歌詞や踊りからみて、室町時代から江戸時代初期頃の間までに伝わったと思われる。

《特　徴》

歌詞は七つからなり、その一つ一つはまたいくつかの文句からなっている。各々独立した歌詞が集まってできている。

その中のいくつかは、大踊りとしても古くから踊られていた。源太郎踊りは、総勢六十余人で踊られる集団芸能で、優雅で絢爛、そして歌曲、踊り方、隊形の変化の多い洗練された踊りである。

《歌　詞》

一「長者殿」
長者殿の親方様のお詣りやる　槍なぎなたで
お供の衆はまた五百人　草葉もなびけど
おたちやる　イヨー　おたちやる

二「あれこそ」
(一) あれこそこれの　山口くだりの源太郎よ
山口くだりの源太郎よ
(二) 源太郎殿こそ　若衆の中でも若衆ぶる
若衆の中でも若衆ぶる
(三) ヤアー　上のお寺に笛が鳴る
アイチョロチョロと笛がなる
(四) 出ては逢いたし　ひまはなし　うまん
芋桶を　なぜおしゃる　ヨーハイ　ヨーハイ

三「音に聞く」
(一) 音に聞く　音に聞く　駿河の国の千代郎殿は
すりの松女と恋を召す　千代郎殿は十五なり
すりの松女は十四なり　十四と十五の仲なれば
言葉に花を咲かせたや

(二) 千代郎殿のおしゃるようには　二つ刀と親両人は
捨つるとも　よもや捨てじの松女さん
(三) 松女さんのおしゃるようには　唐の鏡と親両人は
捨つるとも　よもや捨てじの　千代郎殿　千代郎殿

四「心づくし」
(一) 心づくしの秋野の花よ　見る人ごとよ
見る人ごとに折りたがる　折りたがる　ヨーハイ
(二) 佐賀の斗ますに　いちごが盛りて　君末代よ
君マー末代よ　わしゃ一度　わしゃ一期
ヨーハイ　ヨーハイ
(三) めでし偲びの言葉のかけそう　まだ濃いなれよ
まだ濃い　濃いなれん　野辺の草　野辺の草
ヨーハイ　ヨーハイ

五「近江の国」
(一) 近江の国の道嵐殿は御陣だち　ハーイヤー
あれを見よ　これを聞け　坂東名馬に黒鞍しかせ
小桜おどしの鎧着て　ハー兜は八重の磯の富士
イヨー　磯の富士
(二) 越前様の御所にこそ　ハー　八重菊様とて美人ある
イヤー　同じ御家中に千寿様とて若衆ある
イヤー　愛宕詣りに目と目の見参なされける
恋の玉章贈られた　イヨー　贈られた
(三) 五年この方　偲び申せど　水ほり川ほり　七筋ほりて
七重の御門に七人ごもりの御番所が　忍びもならぬ
御生でそよ　イヨー　後生でそよ

六「土佐から」
(一) 土佐から船が三艘ほど参る　先なは銭よ　中なは金よ
後なわ土佐の早生米よ　イヨー　わさ米ならば
箕でひてはかれ　斗掻は置いて手ではかれ
斗掻は置いて手ではかれ
(二) 十七、八の秋の野を行けば　小萩もさかる
我もさかる　小萩もさかる　我もさかる
(三) ヤアー　今朝は寝忘れた　ほんに寝忘れた
枕屏風に日が射いた　枕屏風に日が射いた

七「うぐいす」
(一) うぐいすが　うぐいすが　花踏み散らす　細足で
大なぎなたで　さくと切らばや　さくと切らばや
やらやら見事　やらめでとう　やらやら見事
やらめでとう
(二) これのお庭に　葦植えて　我よし　人よし
世間なおよし　世間なおよし
やらやら見事　やらめでとう　やらやら見事
やらめでとう　イヨーハイ　イヨーハイ

ヨンシー踊り（市指定文化財）現和庄司浦

《由　来》

昔、庄司浦の人々が琉球を旅するうちに、琉球で習った踊りを故郷に帰り踊り始めたものであり、その時期は定かではないが、江戸時代の終わり頃ではないかと思われる。

《特　徴》

琉球王の御殿を建てるとき、山師が木を切り、村人が運び出し、山方が家材にこしらえ、大工が細工して、つくりあげる様に歌、踊りを付けたもの。それぞれの仕事の道具を持って踊り、種子島の他で例を見ない、たいへんユーモラスな踊りである。

《歌　詞》

（出端）サー　サー　サー　サー

声はいでずとー　くどいてみましょう（アーヨイヨイ）

さらば　東西　静まり給え（ソラヨーイ　ヨーイ　ヨーイサ）

ハリャリャ　コリャリャ　ヤ　ハ　アトセー

西の大殿の　お材木　くだるよ（アー　ヨイ　ヨイ）

地引き車で　地を引いてあげて

（ソラ　ヨーイ　ヨーイ　ヨートヤー）

ハリャリャ　コリャリャ　ヤ　ハ　アトセー

ふゆかち　はやさのか　サイ　サイ　サイ

それとは神秘な　受け声を　受け声を

たち声はしとして（アーソーレ）

それなら何でも　語りましょう　ヤレ浜松に　浜松に（アーソーレ）

さぎと烏が　巣をかけて　小枝を枕に　月をながむるな

※ふいかの　エンヤエイ（アーソーレ）

ヤーコーノ　さんさのエーヤーナー（アーソーレ）

へーばろの　へーばろの　へーばろ　西谷　でーふらせ

色の黒さや　村のはじなるな

※　繰り返し

西方の　西方の　綿のおざいや　雲とたなびくな

※　繰り返し

（引端）えーい　えーい　あやじょ　ほーほみち　ちくよねん

ちょーなさ　エイサー　力を合わせ（ソレ）みなちもそろて

ちおよして　はやしのなー（アーソーレ）えーい　えーい　ちひき

おざいもく　西のおやまでん　エイサー　力を合わせて

（ソレ）みなちもそろて　ちおよして　はやしのなー

どすこい　西之表洲之崎

《由来・特徴》

江戸時代末期、今の三重県から洲之崎を訪れた人によって伝えられたといわれ、二十五代島主種子島久尚公の御前でも披露された。

また、大正元年に集団赤痢が発生したときに、病魔退散のお払いとして八坂神社境内で奉納している。

「どすこい」は、角力（すもう）とり節ともいわれ、全島数か所に分布し伝承されているが、洲之崎のものは、歌詞が違い、踊り、歌ともにしっかりしているといわれる。それは、はじめ島主に見せるため踊ったからだといわれる。

なぎなた踊り　国上湊

《由来・特徴》

なぎなた踊りは、口説きもの（親の仇うち）で江戸時代に全国的に流行したものであるが、国上湊にいつ頃伝わったかはっきりしない。

国上湊に伝わるものは、一場面が「志賀団七口説き」、二場面が「上杉源三郎口説き」からなり、「上杉源三郎口説き」は国上湊のみに伝承されるものである。

新地節　伊関柳原

《由来・特徴》

明治末から大正末期にかけて、伊関の前野家に身を寄せた長崎の源吾という人が、柳原のために作り伝えたものといわれる。

非常にテンポが早く、軽快な歌と踊りである。銭の入った筒を持って踊る銭太鼓のひとつである。

伊関の大山神社（伊関神社）の春と秋の例祭で奉納される。

虚無僧踊り　現和上之町

《由来・特徴》

江戸時代の中頃、薩摩藩領内に虚無僧姿で進入した幕府方の武士に対し、てんびん棒で勇敢に立ち向かった農民の気概をたたえる踊りで、原形は鹿児島市谷山中山地区に伝わる「中山虚無僧踊り」（県指定文化財）とされている。

現和上之町には、明治三十五年頃、伊集院出身の上平太兵衛という人が仕事で現和に在住したとき伝えられたといわれている。

兵児踊り（トンキャッキャー）　現和西俣

《由来・特徴》

明治三十五年頃、宮崎県より丸太という兄弟が椎茸の栽培をするため、現和の西俣に寄留していた。この丸太氏が良い踊りを知っているとのことで、それを西俣の若者に教えて欲しいと頼んで教わった踊りである。

太鼓の音をトン、拍子木の音をキャッキャーともじって「トンキャッキャー」ともいう。種子島で他の踊りに見られない、一種独特のひょうきんさと滑稽さをもっている踊りである。終わりの引庭はテンポを早めながら、最後の一人が引いてしまうまで繰り返す。

ヤートセー　現和西俣

《由来・特徴》

昭和二十一年、戦後のヤミ商売を取り締まるため南種子町出身の門脇巡査が西俣にきていたとき、製糖工場の起工式があり、門脇巡査が披露したのがヤートセーである。

非常に良い踊りであったので、青年団が教えてもらい踊り継がれるようになった。

清左口説きとも呼ばれる。

昭和三十五年頃、出端と引端を南種子町の永田氏から習い、現在の形のヤートセーに出来上がった。

おつや口説き

立山

《由来・特徴》

今から約八百年前、源氏と平家の争いの中、源氏の武将石山氏の娘「おつや」が平家に殺された父親の仇を討つため、京都の東山にある清水寺にこもって、武道の稽古に励み、見事に仇討を果たして丹羽の国に帰るという筋書である。

立山にいつ頃伝わったかはっきりしないが、立山は、平家を追ってきた源氏の祖先が住みついた地域だといわれている。

《参考文献》

「種子島の民俗芸能集」　下野敏見著（一九六三）

文化庁企画第三十回全国民俗芸能大会出演記念　種子島大踊り」　種子島大踊り保存会（一九八一）

「一九八五年　種子島鉄砲まつり参加　西之表市の郷土芸能」　西之表市教育委員会（一九八五）

「「古田棒踊り」西之表市無形民俗文化財指定申請書」　古田棒踊り保存会（一九九九）

「鹿児島県指定文化財申請書（めん踊り）」　西之表市教育委員会（一九七〇）

「西之表市百年史」　西之表市編纂委員会（一九七一）

「鹿児島県指定文化財申請書（大的始式）」　西之表市教育委員会（一九九二）

「県指定無形民俗文化財　横山盆踊」　横山盆踊保存会（一九八七）

「国上郷土史」　国上小学校ＰＴＡ（一九八六）

「西之表市指定文化財申請書」（花踊）　西之表市文化財保護審議会（一九八〇）

「伝承―村の芸能―庄司浦」ヨンシー同好会

「市制四十周年・からいも伝承三百周年郷土芸能大会」パンフレット　西之表市教育委員会（一九九八）

◆写真提供

西之表市役所

種子島開発総合センター

西之表市の民俗芸能

西之表市教育委員会